

〈沖縄戦〉後のエスノグラフィ——痕跡と記憶の戦跡空間——

Ethnography of Post-Battle of Okinawa: Battle Sites, Traces and Imaginaire

北村 毅 (Tsuyoshi Kitamura) 指導：蔵持 不三也教授

本論は、沖縄の「戦跡」という場とそこで行われる実践において、沖縄戦の記憶がどのように表象されてきたのか、という問題を扱うものである。それはまた、いかなる社会的・歴史的コンテクストの中で、なぜ、そのように表象されなければならなかったのか、つまり、その表象の過程に、どのような社会的・文化的想像力が作用しているのか、を問おうとすることである。

本論における「戦跡」とは、単なる「戦闘のあった跡」(広辞苑)でも、近年歴史的遺産、文化遺産としての価値が急速に高まっている「戦争遺跡」の略語でもない。そこは、遺骨収集、慰霊塔・慰霊碑の建立、慰霊祭、戦死者供養、戦跡巡礼(巡拝)、戦跡観光、戦争の語りの実践(語り部、「平和ガイド」)などを通して、生者が死者に実践的な関わりをもつ場である。本論では、その実践的な関わりが、戦跡空間に見出される、死者の痕跡(遺骨、遺物、遺品、慰霊塔・碑、名、証言など)を介して行われてきたことに注目する。

本論では、「平和」のイマジネールという分析概念を導入したが、それは、戦死者の「犠牲」が(戦後)の「平和」と「繁栄」をもたらしたという、戦後日本社会の定見を創り出す社会的・文化的な想像力として機能している。戦後民主主義に育まれた、「平和」のイマジネールは、様々な政治的位置に親和的であり続けた。それは、ありとあらゆる思想信条の緩衝としても働けば、触媒としても働く、変幻自在のイデオログであった。何よりも、その鶴のごときイデオログは、死者を想起する、死者と対峙するときの身構えとして「戦後の精神」を形作ったのである。

第1部「痕跡の戦跡景観」では、戦跡景観を巡って、「平和」のイマジネールがどのように空間的に表象されてきたのかを検証し、第2部「痕跡を辿る人々」ではそこを舞台に展開された日本遺族会青年部の慰霊実践を事例として、「平和」のイマジネールが彼らのナショナルな共同性を編み上げる原理としてどのように作用してきたのかを論じた。そして、第3部「痕跡を語る」では、「平和」のイマジネールが「ナショナルな語り」を通して表現されてきた「記憶の場」——戦跡の「表通り」——を検証し、1970年代以降、それに抗する拠点として設定された戦跡の「裏通り」において、いかなる対抗的実践がなされてきたかを明らかにした。

第1部では、敗戦直後から現在までの半世紀の間に、死者の痕跡が戦跡景観の中に展開される様式がどのように変化してきたのか、その変転のダイナミクスを追った。敗戦直後から1950年代まで(第1章「沖縄戦の痕跡の原風景」、60年代から日本復帰前後まで(第2章「遺骨の行方、その中央集権化」)、そして、90年代から現在まで(第3章「摩文仁——拮抗する〈平和〉のイマジネール」)の三つの時代区分に焦点化し、「遺骨野ざらし」報道、摩文仁を中心とした各都道府県の慰霊塔建立、「霊域整備事業」や遺骨収集、「平和の礎」などを事例として、その景観の変化に「平和」のイマジネールがどのように作用しているかを論じた。

各県の慰霊塔が林立する摩文仁の景観は、「平和」のイマジネールが空間的に表象されたものであるといえよう。そこは、富山県の「立山の塔」の碑文に典型的にみられるように、「日本の復興繁栄の時にあたりこの尊い犠牲を平和の礎として戦没のみ霊にかぎりなき景仰の誠」が捧げられる空間である。そこでは、「指定霊域」(第2章3節)というふるいにかけて、死者が選別される。「霊域整備事業」の完成によって、国立沖縄戦没者墓苑に集められた「無名戦没者」の遺骨は、固有性を剥奪されることによって、「国の礎」という観念的集合に囲い込まれた。まさにそこは、現在の「平和」に対して、「先の大戦」の死者が供犠として捧げられる空間なのである。本論は、摩文仁の丘の麓につくられた「平和の礎」でさえ、そのような「平和」のイマジネールから必ずしも自由ではないことを明らかにした。

第2部では、沖縄戦戦死者の遺族(遺児)の戦跡を巡る実践を考察した。日本遺族会が、次代の継承者たる「遺児」を訓育する場所として、沖縄の戦跡を最大限に活用したことはほとんど知られていない。第4章「ナショナリズムと戦跡——遺族会青年部の〈平和祈願慰霊大行進〉と戦跡巡礼」では、「民主」と「平和」の戦後教育を受けた日本遺族会青年部の遺児たちが、戦跡という場所で〈父〉の足跡(痕跡)をトレースすることによって、いかにナショナルな共同性を確立していったのか、その過程にどのように「平和」のイマジネールが作用しているのかを論証した。一方、第5章「痕跡と喪——戦死者に〈出逢う〉ということ」では、戦跡において、遺族の「喪の作業」がいかに果たされたのかを考察した。そこでは、戦跡空間は、第4章に

見たような、死者の死を意味づける場（何のために死んだのか）ではなく、死者の死を追認する場（どのように死んだのか）として理解される。

第3章で詳述したように、国家のために死んだにせよ、平和のために死んだにせよ、戦死者を「犠牲」のメタファーで囲い込むことは、その死に一定の定位を与える。つまりは、エルネスト・ルナンが、1882年に行った講演「国民とは何か」ですでに述べているように、ナショナルな共同性は、「人々が過去においてなし、今後もなおす用意のある犠牲の感情によって構成された大いなる連帯心」（E・ルナン他著『国民とは何か』インスクリプト、1997年）によって確保される。ルナンは、この講演で、「国民とは魂であり、精神的原理」であるとの見解を示している。まさに本論は、第4章において、そのような「魂＝精神的原理」のひとつの具体例として、日本遺族会の遺児たちの間で「平和」のイメージが作用していたことを確認した。「平和」のイメージに仲介させて、「戦没者＝父たち＝みたま」の声、「国民の声」として召還されることによって、戦跡という場に「死者の／ための民主主義」というナショナルな政体が発揚されたのである。

一方で、本論では、身体的原理としての「血」のイメージも検証された。それは、ヨハン・ゴットリーブ・フィヒテが、「ドイツ国民に告ぐ」（前掲『国民とは何か』所収）において主張したような、血族共同体的な国民概念である。そこには、血を抽象化する作用が働いている。抽象化された血においては、無数の血のヴァリエーションの中からある特定の血のみが抽出されることによって、人々は他の血の存在——それは実際の血であり、それが流された記憶であり、血というメタファーによって証される暴力——を抑圧する。個々に流された血の多様性は閑却され、「戦死者＝英霊」から遺児たちに受け継がれる血脈としての血、民族が流した概念として血のみが記憶されるのである。以上のような「血」のイメージの機能によって、無数の戦死者の血の特殊は、民族の血という普遍の中に回収されていく。

そのプロセスを筆者は、「血の提喩法」と呼んだ。第4章では、その血を巡る提喩的なロジックが、「〈国に殉じた〉死者たちにより構成された領土獲得運動」（富山一郎『戦場の記憶』日本経済評論社、1995年）へと人々を動員するレトリックとなっていたことを確認した。

第3部では、死者の痕跡を通して沖縄戦が語られる、相対するふたつの形式について論じた。まず、第6章「〈ナショナルな語り〉のモード」では、長い間沖縄戦の支配的な語りであった、戦死者が国家のために死んだ者として表象される「ナショナルな語り」について検討した。琉球政府、そして沖縄県の観光施策に則り、かつ慰霊巡拝団を中心とし

た観光客のニーズを満たそうとした、オーセンティックな戦跡観光の「表通り」では、「ナショナルな語り」が再生産され続けた。それに対してアンチテーゼを突きつけた語りの場が、戦跡の「裏通り」であった。第7章「戦争体験継承の臨界点——ガマと平和ガイド」では、その「裏通り」を舞台として、「ナショナルな語り」に回収されえない死者について語られる「証言の領域」（富山一郎）について考察した。そこでは、生者と死者は実践的な関わり合いを持つ。具体的には、「ガマ」（自然洞窟）を巡る「平和ガイド」の実践を事例として、死者の「代弁＝表象」の政治から限りなく迂遠な戦争の語りの未来像を析出した。

「平和ガイド」とは、本土から訪れる修学旅行生を主な対象として、戦跡や基地を案内し、平和学習のサポートをする人々ないし実践の総称である。彼らは、ガマの中で、「現在」の視点から沖縄戦について語る。2003年度には、33万人以上の修学旅行生が沖縄を訪れたが、その約7割が「平和ガイド」の案内で、ガマの中に入った。「集団自決」や日本軍による住民虐殺など、戦中数々の惨劇が起こったガマの中には、未だに遺骨や遺物が散乱している場所も多く、「平和ガイド」は、その場にまつわる証言に基づいて、そこでどのようなことが起こったのかを語るなのである。

第7章では、「平和ガイド」による戦争の語りの実践を論述し、それが、「平和」のイメージを乗り越えようとする、ひとつの試みであることを明らかにした。従来の戦争の語りは、「平和」のイメージとパラレルな関係にある。沖縄を訪れる修学旅行生の多くは、「平和」のイメージを媒質として形成された平和教育によって、「平和」という言葉の使用法に自縛されている。そのような生徒たちに向かって、「平和ガイド」は、受け手が馴らされてきた「平和」とは違う「平和」（つまり現存しない「平和」）を投げかける。「平和」に対する慣れからの解放、あるいは「平和」が現存しないことの気づきへの促し、それこそが「平和」を「ガイド」する彼らの存在理由なのである。